＜三女のボランティア活動＞

つい先日、自分の勤める幼稚園に、園児たちに読んでやりたい本が置いてないから、本屋へ買いに行こうと誘われました。買いたい本へたどり着くまで、子どもの頃に読んだ本をあれこれ手に取っては、いちいち内容を説明してくれます。とても楽しそうに本選びをし、小遣いで２冊の本を買っていました。どうしてそこまでするのか理由を聞いてみると、「人に喜ばれる事をするのは気持ちいい」と答えたのです。そう言えば、三女のこういう心がけの兆しを見せるエピソードを思い出します。

ある日の夕食時のことです。子ども達同志で奇妙な手の動きを始めました。よく見てみると、どうも手話のようです。何をしているのかと聞いてみると、「お母さんに聞かれては都合の悪い」話をしていたらしい。また一体、どこで手話などを覚えてきたのでしょうか。

学校区の方針なのか、週に数時間、耳の不自由な子ども達と一緒に授業を受けていました。その子ども達との意思疎通を図るため、カリキュラムに手話が組み込まれていたようです。成績表に「手話」がなかったので、目の前で「都合の悪い話」をされるまで、知りようがなかったのです。そう言えば、それまで何度も、学校のイベントで、耳の不自由な生徒と保護者のための手話のサポートを目にしていました。この事が、後の三女のボランティア活動につながっていきました。

我が家の末っ子・三女の中学校の卒業式でのことです。保護者席で、娘が中学の卒業証書を受け取る晴れ姿をカメラに収めようと、そわそわしながらその登場を待っていました。その証書の授与式の前に行われる「Distinguish Recognitions」というアナウンスの後、突然わが子の名前を呼ばれて「エッ？」。隣にいた娘の幼馴染のご両親から「おめでとう」と声をかけられ、驚きと興奮で頭が真っ白。中学を無事終わったこともめでたいことでしたが、「Award」をいただく事は、全く知らされていませんでした。しかも２つとは。内容を説明されてまたびっくり。一つは「Perfect Attendance」。そして、中学２年間の昼休み時間を、Special Education クラスの車椅子を必要とする、また、目や耳の不自由な生徒のサポートをした事に対して、表彰されたのです。個人の時間を、自分のためではなく他人のために使った事が大きなポイントだったようです。三女は高校でもやはり、卒業するまで１日も休むことなく、このお手伝いを続けました。

わが家の３人娘

私のように、何らかの機会がなければ、分かっているつもりでも、子ども達が学校で習っている事を見落としがちです。三女のボランティア活動も、小学校で身体に障害のある同世代と接する経験があったから、影響を受けたのは明らかなようです。

＜伝えたい事＞

子どもを通じて、アメリカのいろいろなカルチャーを知ること度々です。その中でも、「Caring」と「Sharing」を、「人の資質として備わるべき大切なもの」として、私自身が考えて子ども達を教育してきました。それを望む社会があり、子ども達がその社会の一員として生きるために、身につける努力を惜しまないだろうと信じているのです。

松本 康子　（まつもと やすこ）

1979 年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。

子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の姿を紹介させていただきます。
皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか？

海外で異文化に接して様々なことを学ぶのは、なにも子どもだけではありません。大人も、日常生活の中で学んでいきます。

その中でも、「良きアメリカ人となるため」の教育を受けている子どもの保護者としての経験は、日本では想像できないものがあります。そこで見るものは、ボランティア活動という行動だけではなく、その底にある Caring や Sharing という考え方の違いです。

子どもは、その考え方をアメリカ社会の中で無意識に吸収して行動するようになります。その行動だけを見て、その考え方に気がつかない親と子どもの関係は、ギクシャクし始めます。

海外での子育てには、親も子どもと共に学んでいく必要がある。今回の康子さんの話を読んで、私はそんなことを考えました。皆さんは？